

## 高齢者と幼児の共生 —保護者から見た世代間交流の捉え方—

Coexistence of the Elderly and Young Children: Intergenerational Interaction  
from the Perspective of Parent

北村 光子

キーワード：家庭教育, 世代間交流, 高齢者, 幼児

### 要旨

核家族の増加により、子育てを経験している祖父母との三世同居が低下している現状は、生活価値観も同様に变化する。その変化の影響を多く受けるのは次世代を担う子どもたちである。以前は、祖父母（高齢者）との同居が慣例であり、そこから倣う「基本的生活習慣や態度」などを学び社会に出ていくことが多かった。しかし、現代社会では、核家族が定着し夫婦共働きや家事など女性の負担増、時間的ゆとりがない状況では、家庭教育の低下を否めない。現状、保育園はその一葉を担う。

そこで、保育園での高齢者を介在した世代間交流（保育内容）をもとに保護者から見た子どもへの影響を調査した。その結果、高齢者からは「昔の遊び・歌」、「礼儀、礼節」などを伝えることで、子どもたちに、「社会が身につく」、「命の尊さ」、「尊敬」、「優しさ」を学ぶことができることを期待していた。

また、子どもたちの「活発さ」、「明るさ」、「無垢」なところから高齢者は、「元気になる」、「パワー」がでるなど相乗関係が成り立ち世代間交流の効果が期待される。しかし、園に通う保護者からは、世代間交流という保育内容が入園理由ではなく、「自宅に近い」ことが理由であった。

今後、世代間交流は、多角的な面から検証し社会的にもより一層の充実が求められる。

### 研究背景と目的

日本では少子高齢化が進み「2025年問題」が目前である。若い世代の人口や出生率は減少傾向であるのに対し、75歳以上の後期高齢者が国民の4人に1人という超高齢化社会を迎える。社会保障の担い手である労働人口が減少することによって危惧されるのは「社会保障費のバランス崩壊」、「労働人口への負荷増加」、「医療・介護業界の需要と供給のバランス崩壊」が挙げられる。

この人口のアンバランスによって近年の家族形態は、多種多様であり時代によって変化する昭和の社会通念が該当しない。また、家庭での生活価値観は、家族の生活の営みによって形成されることが多い。しかし、社会の成長過程によって変化する。それは人間関係の在り方にも影響を与える。その1つとして松下（2022）は「人付き合いに関する価値観の変化」を挙げ、①趣味や習い事など子どもを通じての関係性は疎遠になる②生活必需品や子どもの教育費など家計への影響も大きく変動することから、益々人間関係の希薄化している状況社会の中で多種多様な生活様式を強いられている」と述べている。

また、文部科学省（中央審議会中間報告まとめ 2004）から子どもの育ちの現状と背景に対して、「基本的生活習慣や態度が身についていない」、「他者との関わりが苦手」、「自制心や忍耐、規範意識が十分に育っていない」などの課題や「情報社会のためか世の中についての知識は増えているが、断片的、受容的で学習への意欲関心が低い」と指摘している。

その原因は、前に述べた少子高齢社会、核家族、地域社会のコミュニティの低下などがあげられるが、小川（2002）は、親の状況を「科学技術の発達などで多くの負担軽減が可能になったにもかかわらず、かえってそれらが過保護、過期待、過干渉などの母子癒着傾向を助長したり、子育ての重責が押し付けられて追い込

まれたり、幼児虐待、登校拒否、家庭内暴力などの家庭児童問題を発生させている」としている。宮木(2004)は「直接的な不自由感やせっぱ詰まった育児疲労はそれほど感じないものの、慢性的なゆとりのなさや漠然とした不安や悩みが積もり重なって何となくストレスが溜まっていくといった状態が、今日の育児期の母親の姿なのではないだろうか。」と述べている。

さらに、家庭教育について、2007(平成19)年3月国立教育政策研究所の「家庭の教育力再生に関する調査研究」結果では「家庭の教育力=低下」を示唆している<sup>注1)</sup>。

そして、2005(平成17)年文部科学省は、子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性は「生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、情緒的・知的な発達、あるいは社会性を涵養し、人間として、社会の一員として、より良く生きるための基礎を獲得していく。」また「幼児期は、知的・感情的な面でも、また人間関係の面でも、日々急速に成長する時期でもあるためこの時期に経験しておかなければならないことを十分に行わせることは、将来、人間として充実した生活を送る上で不可欠である。」と述べている。

2023年、国は子ども政策として「子ども家庭庁」に移管し「こどもまんなか」を掲げ児童虐待、貧困、いじめ問題などの諸問題について戦略を講じ所掌事務では、小学校就学前の子どもの健やかな成長のための環境の確保及び小学校就学前の子どものある家庭における子育て支援に関する基本的な政策の企画及び立案並びに推進を挙げている。

したがって、子どもを取り巻く人々は、幼児期における教育がその後の人間としての生き方を大きく左右する重要なものであることを認識し、子どもの育ちについて常に関心を払うことが必要である。

既に述べているが、子どもの成長過程の環境によって心身に影響を及ぼし、その人的環境において各世代と関することは重要である。

よって、本研究は、高齢者を介在した保育内容(世代間交流)をもとに保護者から見た子どもへの影響を考察する。

## 1. 高齢者

我が国は、超高齢社会であるが健康状況の改善や介護予防への意識の高い高齢者が増加しつつある中で、2017年1月に日本老年学会は、高齢者の定義を従来の65歳以上から75歳以上に変更することを提案している。その背景として、2008年4月、後期高齢者医療制度の施行や2014年5月、日本老年医学会による「フレイル」の提唱。また、2016年4月には、高齢者の医療の確保に関する法律の一部改正による、高齢者の特性に応じた保健指導等が、広域連合の努力義務とされた。それに加え、各市町村の取り組みと「健康」に対する意識の高さも影響している。この経過は高齢者の新たな認識を確立する。

### (1) 身体的特徴

一般的に高齢者の身体的特徴は、体内のそれぞれの器官を構成する細胞の数の減少や細胞そのものの機能が衰える。また、外部環境の変化への適応力が低下し、複数の病気や症状になりやすい傾向にある。その結果、さまざま疾病に罹患し完治しにくい「フレイル」につながる可能性がある。

### (2) 心理的特徴

心理的特徴は、精神的機能と知的能力に分けられ精神的機能は、新しいことを覚えることや直前の出来事を記憶する、過去のことを想起する事が低下する。また、注意力や集中力散漫の状況にもなる。

注1) 国立教育政策研究所が2007(平成19)年3月に、全国の子どもを持つ親8,400人を無作為抽出して、940人から回答を得「家庭の教育力再生に関する調査研究」結果では、「最近家庭の教育力が低下しているのではないか」という意見に対し、「全くそのとおりだと思う」と答えた人37%、「ある程度そう思う」と答えた人が45%にのぼり、8割をこえる親が「家庭の教育力が低下している」と受け止めている。

性格は、頑固や保守的傾向が強くなる。人への態度が厳しくなる猜疑心が強くなりやすいのも特徴である。また、死への不安感から健康への興味が異常に高まることもある。このような状況は、「死別」、「退職」、「社会的立場の喪失」、「身体機能低下」の因果関係も考えられる。権藤恭之（2018）は、高齢者を横断データから全年齢群で標準値変換した70歳群、80歳群、90歳群の身体機能レベルと精神的健康を示し「年齢が高くなるにしたがって、身体機能レベルは低下するが、精神的健康は維持されている。」と述べている。

そして、Kagamimoriら（2004）は、「高齢者のライフステージにおける代表的な心理的ストレスラーとして「退職」、「介護」、「配偶者との死別」を取り上げている。

### （3）知的能力

知的能力は、計算や新しいことを覚えることなど苦手であるが、これまでの経験や知識をもとにした言語の理解能力などは比較的保持される。また、培ってきた理解力が記憶力低下を補い新しいことを習得する、そのことが要因となり秀でた能力を発揮でき創造性が増すことも可能である。

## 2. 保育園

### （1）保育園と保育所の違い

児童福祉法において「保育所」を正式名としているが、開設にあたって「保育所」、「保育園」どちらの名称を使用するかは法律の規定はない。また、「保育所」は保護者が様々な事象で、日中の保育がおこなえない場合に保護者に代わって保育する児童施設と定義されている。

### （2）保育園の入所要件（保育を必要とする事由）

- ①就労 月64時間以上はたらいているとき
- ②妊娠・出産 母が、「出産予定日の8週間前」から「出産日の8週後の翌日が属する月の末日まで」の期間にあるとき
- ③疾病・障がい 障がいの場合
- ④就学・職業訓練 大学や職業訓練などで月64時間以上通学しているとき（通信制を含む）
- ⑤親族等の介護・看護 病人や障がい者、要介護者を月64時間以上介護・看護しているとき

### （3）調査対象A保育園

#### ①概要

研究対象であるA保育園（2014年開設 定員55名（現18名在籍）0歳児～就学前）は、F市H区に所在する一般社団法人（認可外保育園）である。近くにはM駅もありアクセスもしやすい。また駅の周辺は閑静な住宅街、東の住宅地の中には敷地の広い公園があり森林浴も楽しめる。

園児は、自由にのびのびと園生活を過ごしている。受け入れ園児も多様な国籍で中国、アメリカ、マレーシア、日本など多文化交流もできる。

#### ②目標

- 物事をじっくり考えて行動し最後までやり遂げる（考）
- 美しいものに感動し、素直で優しく思いやりをもつ（心）
- 相手の思いを理解でき、自分の意思をしっかりと伝える（伝）

#### ③事業目的

- 子育て支援及び高齢者支援を通じて、児童又は青少年の健全な育成及び高齢者の福祉の増進に寄与する

とともに社会福祉の推進を図るとのこと。

○教育等を通じて国民の心身の健全な発達に寄与し、又は豊かな人間性を涵養することを目的としている。さらに、上記の目的に資するため次の事業を行うことも掲げている。

- 幼稚園、保育園及び放課後児童健全育成事業の運営
- 高齢者及び地域住民のためのふれあいサロンの運営
- セミナーの企画・運営
- 介護保険法に基づく居宅サービス事業及び介護予防・サービス事業
- 介護保険法に基づく地域密着型サービス事業及び地域密着型介護予防サービス事業
- 前各号の事業に付帯又は関連する事業

等である。

また、保育内容に関しては8つのこだわり保育を実施している。

1. 遊ぶ 体育あそび・みんななかよし・自然もなかよし（没頭する、粘る、礼儀、姿勢約束、歩く、走る、跳ぶ）
2. 食育 自然の恵み・感謝・安心・安全な無添加・無農薬（種まき・育てる・観察・収穫料理する・おいしく食べる）
3. 感じる 歌・わらべ歌・楽器演奏・音楽リズムあそび（歌う、感じる、踊る、奏でる手をつなぐ）
4. 表現 絵画、造形あそび（感じる、表現する、創造する）
5. 言葉 美しい日本のことばと伝承あそび・英語あそび・中国語あそび（日本の伝統・習慣を知る、世界を知る）
6. コミュニケーション 絵本・紙芝居・レター通信・メディアコミュニケーション（聞く、見る、想像する、話す）
7. 考える 読み・書き（ひらがな・すうじ）・そろばんあそび（気持ちを理解する、伝える、答えを出す）
8. 学ぶ リノラススポーツクラブ（体育）、英語教室、ベストスイミング、ドリームピアノ教室（専門家による学習）

である。今回の研究は、1. 3. 5. 6. 7に該当する。

保育園と関りをもつ高齢者は、園の道路向かいの施設に居住しており高齢者のADLは自立、一部介助、車いすの方が居住している。施設と保育園の了承のもと自由に来訪可能である。保育園の来訪者は、自立歩行者が5名程度であるが、時折、施設職員と共に車いすで来訪する方も3名程度である。その際は、子どもたちと自然に「会話」、「手あそび・あやとり」、「ままごと」などで交流している。

行事は、8月の子ども祭りや敬老の日など一緒に参加もしている他にも体育教室、ピアノ教室、2階のスペースでアロマ教室、上下肢などのエステ、トリートメントなど外部からの依頼で間貸しも実施しており、園児は、自然と他世代の交流が経験できる環境である。



写1 夏祭り



写2 敬老の日イベント



写3 敬老の日イベント

### 3. 研究方法

#### (1) 調査対象と期間

調査対象：A 保育園保護者（1 歳児～5 歳児）15 名（事前にアンケート協力を求め、承諾する保護者が 15 名であった）を対象とした（有効回答率 86.7% 内国籍別 中国 13.0% 日本 87.0%）

A 保育園の園児は全員近隣に居住している。

調査期間：2018 年 9 月 25 日～10 月 2 日

倫理的配慮：保護者へのアンケート調査は、研究の目的及び方法を口頭と文書で説明した。

また、途中の棄権については何ら不利益を蒙ることがないことを説明し、同意書の提出を持って承諾を得たものとした。

尚、本研究は研究者機関（倫理審査委員会）の承諾を得ている。

#### (2) 方法

保護者に対しアンケート調査を実施した。

アンケート内容は、高齢者との交流に関する内容である。分析は単純集計と KJ 法によりまとめた。

### 4. 結果と考察

#### (1) 保育園選択

A 保育園は、事業目的の 1 つである「高齢者との関わり」を挙げ高齢者との自由な交流や定期的な年間の行事を通し福祉教育の向上を図る意図がある。また、ホームページやインスタに挙げ入園説明会でも案内しているが、アンケート結果は、保育園（入園希望）の選択肢一つに「なった」38.5%、「ならなかった」46.2%、「知らなかった」15.4%である（表 1 参照）であり、保育園選択肢の最優先ではなかった。その理由として①地域社会に対する保育園の教育指針が周知されていない（説明が十分でなかった）、②保護者自身が高齢者に興味がなかった、③保育内容「体育教室」、「ピアノ」、「園外保育」に比重が高い、④保育士の資質（高齢者理解）、⑤別の優先順位がある。などが考えられる。

また、保育園選択に関して、大日向（2012）は、待機児童の多い首都圏の母親を対象に、2009 年から毎年、保育園への入園の実態を調査し 3 年間の変化をまとめている。2 回目の調査である 2010 年では、保育園の選択肢として『自宅から近い』が多く、『地理的要素』が保育所選択において重視されている。

2016（平成 28）年、厚生労働省の委託を受け株式会社フォトクリエイト調査実施機関「地域児童福祉事業等調査報告」でも表 2 のように、認可外保育施設の選択理由（複数回答）では 37.7%が「自宅から近い」、次で「保育方針や内容が良かった」28.1%、「見学した時の職員の対応が良かった」22.6%になっている。最優先選択の理由は「保育方針や内容が良かった」14.1%であった。

保育内容への期待において、住田他（2012）は、熊本県および徳島県内の幼稚園・保育所合計 6 園の協力を得て調査した結果、最も期待されていたのは「友達と仲良くする」、「ルールや決まりを守る」、「挨拶や礼儀を守る」といった社会性や人間関係に関連する内容であった。一方、『芸術的能力』『文字や数を教える』といった知育に関する内容はあまり期待されてはいなかった」と述べている。

以上の 2 点から、A 保育園は F 市でも H 区という地域性（地理的環境、両親の所得状況、企業などの雇用状況・雇用形態など）を詳細に調査し保育内容の再検討、また、世代間交流について具体的な保育内容など提示する必要がある。

表1 選択理由 (%)

	はい	いいえ	知らなかった
1歳児	7.7	0.0	0.0
2歳児	7.7	0.0	7.7
3歳児	15.4	23.1	7.7
4歳児	0.0	23.1	0.0
5歳児	7.7	0.0	0.0
合計	38.5	46.2	15.4

表2 認可外保育施設選択理由（複数回答） (%)

	選択理由（複数回答）	選択理由（最優先）
自宅から近い	37.7	11.4
保育方針や内容がよかった	28.1	14.1
見学した時の職員の対応がよかった	22.6	5.6
利用する時間の融通がきく	21.4	6.7
希望する時期から預けられた	18.9	5.0
職場に近い	18.9	6.4
認可保育園へ入れなかった	17.7	8.4
希望する時間預けられた	17.1	5.0
希望する年齢から預けられた	16.4	3.4
紹介された・勧められた	16.2	3.9
評判が良かった	13.4	3.2
通勤途中にある	12.4	2.1
利用料（保育料）が安かった	12.1	3.3
他に預ける所がなかった	8.8	2.2
施設や職員の服装などが衛生的で好感が持てた	5.0	0.9
保育士の人数が十分確保されていた	4.4	0.7
施設設備が整っていた	4.4	0.6
その他	9.2	6.5
不詳	0.5	10.6

出典：厚生労働省「地域児童福祉事業等調査報告」（平成16 2004）

## （2）高齢者交流

A 保育園では、「高齢者交流」を保育園選択の理由としたのは、1歳児、4歳児、5歳児、100.0%、2歳児50.5%、3歳児83.4%であった（表3、表4参照）。2歳児の割合が低い結果は、アンケート内容だけでは判別ができなかった。今後、検討の余地がある。

また、高齢者と交流する子どもへの影響について1歳児、4歳児5歳児では「昔の暮らしを聞ける」、2歳児は「昔の伝承遊びを教えてもらえる」、3歳児は「高齢者を大切にする」、「高齢者から昔の暮らしの話の聞ける」、「昔の伝承遊びを教えてもらえる」ことを挙げている。このことは、上村ら（2007）は「高齢者との日常的な交流は他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与している。」と述べ高齢者交流は効果があると言える。

伝承遊びは、その種類も①身体を使用した遊び（鬼ごっこ、かくれんぼなど）、②道具を使った遊び（あやとりやおはじきなど）、③言葉遊びや歌を使った遊び（かるた、わらべうたなど）④「缶蹴り」のように道具を使いながら体を動かす遊びや、「はないちもんめ」のように歌いながら体を動かす遊びもある。これらを通して、「挑戦」、「失敗」、「羞恥心」の表出がありEricsonの発達段階の幼児前期に該当する。

前述した伝承遊びの中で、高齢者を対象とした伝承遊びは、②、③に該当する。また、これらを通して高齢者を敬う可能性もある。このことは、土井ら（2009）は「手遊びなど一緒にやる場面で交流できない

表3 選択理由（年齢別） (%)

	はい	いいえ
1歳児	100.0	0.0
2歳児	50.0	50.0
3歳児	83.4	16.6
4歳児	100.0	0.0
5歳児	100.0	0.0

※各年齢を100.0%とする

表4 高齢者の影響 (%)

	尊敬	大切	昔の暮らし	伝承遊び	躰	その他
1歳児	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
2歳児	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
3歳児	0.0	16.7	33.4	49.9	0.0	0.0
4歳児	0.0	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0
5歳児	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0

※各年齢を100.0%とする

高齢者を気遣う意見もあった」と述べていることからわかる。

子どもの成長過程において高齢者と常時交流することは、大きな影響がある。安永らは（2012）、神奈川県 の A 中学校の全校生徒 735 名を対象に調査を実施し「祖父母との交流が頻繁である生徒は高齢者イメージが肯定的であった。

また、学校の支援活動である高齢者との交流やボランティアに参加している生徒は、高齢者イメージの低下は見られなかった。」と報告していることから、高齢者との関りは子どもの成長過程において重要な存在だと言える。

現に、同年齢の集団保育だけでなく、地域の人々と高齢者との交流、異年齢児交流、地域の伝統を生かした保育内容、地域の福祉的需要への貢献、地域の子育て支援等の必要性が認識され「地域に開かれた保育園」を追求する方向が国の施策として打ち出されているしかし、A 保育園でも取り組んでいるが、表6より、高齢者の話題については「ある」と回答したのは15.4%、「ない」と解答したのは84.6%であった。話題とならないのは、高齢者との交流があるにしても園児の心に響くインパクトがないことが推測される。自由に高齢者と往来をできる状態を保持しているが、高齢者と関わる「きっかけ」づくりとして行事だけでなく具体的な交流計画・実施することが重要である。

### （3）高齢者の話題

#### ①家族世帯

表5、表6より、祖父母との同居世帯は4歳児にのみであり全体の66.0%を占めていた。その他の世帯は全て核家族であった。

そこで、4歳児の同居世帯に着目すると、100.0%の保護者が高齢者の交流目的で保育園選択をしておらず、また、高齢者との交流を子どもから聞くかという問いには、73.3%「ない」と回答している。このことは、平日頃から高齢者に接する機会が多く、高齢者を自然に認知していると推測される

#### ②時間

A 保育園に通園する園児は全て近隣に居住し利用する時間は、ほぼ7:30～18:00である。中には、7:00に登園する園児や18:00過ぎて「すみません」と言いながら親が駆け込んで迎えに来る姿も時折ある。この状況は、自宅が保育園に近く、職場から保育園が遠いことを意味する。このことは、表2の「自宅から近い」厚生労働省「地域児童福祉事業等調査報告」と同様な結果を表している。また、日中は保育園であることから、親子の触れ合う時間は少ないと推測する。

表5 世帯 (%)

年齢	形態		きょうだいの有無
	核家族	拡大家族	
1歳児	100.0		有
2歳児	100.0		無
3歳児	100.0		有
4歳児	34.0	66.0 (祖父母)	無
5歳児	100.0		無

※各年齢を100.0%とする

表6 高齢者の話題 (%)

	ある	ない
1歳児	0.0	100.0
2歳児	0.0	100.0
3歳児	7.7	38.5
4歳児	16.7	73.3
5歳児	0.0	100.0

※各年齢を100.0%とする

株式会社フォトクリエイト社の2016年調査でも「保護者の7割以上が子どもと向き合っ話をする時間が足りない」と報告している。この背景は、共働き、もしくは労働時間の延長（残業）など過重労働の環境もあると推測される。

しかし、宮木（2004）は「直接的な不自由感やせっぱ詰まった育児疲労はそれほど感じないものの慢性的なゆとりのなさや漠然とした不安や悩みが積もり重なって何となくストレスが溜まっていくといった状態が今日の育児期の母親の姿なのではないだろうか」と指摘している。このことも含め現代社会の母親像を明らかにする必要がある。

#### （4）自由記述

Ericsonの発達段階と同様な傾向として、表7、図1に示すように、高齢者との交流によって昔遊びや歌、また、幅広い経験から「知識」、「礼節」を伝え子どもには「社会性」、「命の尊さ」、「尊敬」、「やさしさ」などを身につけるなど社会性を備えた心豊かな子どもに成長できることを期待している。

このことから、親は「子どもの躰」や「社会的教育」を重要視していることが推測されるが、その保護者の背景には、「雇用形態」や「家族形態」、「経済的な状況」、「保護者の年齢」、「価値観」などから保育園に依存せざるを得ない状況も推測できる。

また、子どもの教育、学力に関しては、尾嶋（1990）、荒牧（2000）、Blossfeld and Shavit（1993）は「子どもの教育達成や学力が出身階層・家庭的背景によって異なることは、社会階層論や教育社会学の領域で場所や時代を問わず確認されている」ことから証明されており、教育、学力向上を望む親にとっては、保育園での保育内容に関心があるといえる

そして、白井・小林（2016）は「経済的に豊かな家庭ほど課外活動に支出しており、学歴の高いほど家庭で子供への関わりを熱心に行っている」と述べ、真田（2015）は「第5回 幼児の生活アンケートを実施。その結果は、1995年に実施した第1回の調査では、400万円未満の比率は5.9%、2015年の調査では13.4%に増加（図2参照）を踏まえて、

共働きは増加しているのに、年収が相対的に低い世帯は20年前よりもむしろ増えています。世帯年収と教育費が相関する中で、子ども一人にかかる教育費は1995年調査では平均8,556円でしたが、2015年調査では平均5,960円に減少しています。自由回答からは「習い事にまで費用をかけられない。子どもにさせたい経験をさせてあげられない」と葛藤を抱く保護者の様子も見られました。

と報告している。

以上のことから、親は子どもの将来を案じ、その一端を保育園に依存しがちである。

表7 自由記述まとめ（重複内容は除く）

項 目	
高齢者に期待すること	高齢者と交流することで、保育園に期待すること
昔の歌、遊び（屋外・屋内共に）を沢山、遊び、触れ合い、お互い話をして欲しい。そのことで社会性が身につく	核家族が進んでいるので、高齢者の方と子どもたちが自然に接する機会が沢山増えてほしい。私自身、田舎の大家族で育ったのでその時代が懐かしく感じる。
年長者の言うことをきちんと聞ける子になって欲しいので、厳しく接してほしい（礼儀、礼節を学んでほしい）また、親とは違う視点で子供に接してほしい	昔と同じ環境は無理でも、知り合いとして高齢者の方と沢山関わることができるのは、子どもにとって幸せだと思う。
高齢者は、子どもから元気ももらえ（活発・明るさ・無垢）、子どもは高齢者を労うという思いやりの心が芽生えて、心豊かな人に育ってくれたら嬉しい。	A保育園で施設を訪問するイベントはとても素晴らしいことだと思います。是非、今後も積極的に続けていただければ親としては嬉しいです。
命の大切さ、尊敬や優しくするとう気持ちが育つと思う。	子どもが高齢者の方と接する機会が、沢山あることがありがたいです。
親の価値観だけがすべてではなく色々な大人、いろいろな考え方があることを示してほしい（普段、母子のみのクローズな時間が長い）	親、保育園の先生方と併せて子どもへ「あなたが大切だ」というメッセージを体験してもらえたら有難い。
生活の知識や経験など、子育てや人生の困難さを乗り越えるためのアドバイス、経験をいただけたら、とてもありがたい。	折角、近所にデイサービスや老人ホームがあるのでもっとイベントと一緒に楽しんだり、食事をしたり、手紙や制作物のプレゼントをしたり…。もっと身近に感じて関わって欲しい
ホームだけでなく、もっと屋外（公園など）に行ってみて欲しい。にぎやかな高齢社会がいい。	

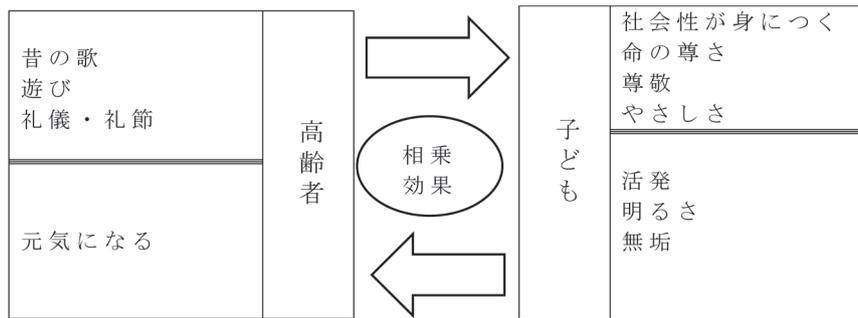


図1 双方の期待

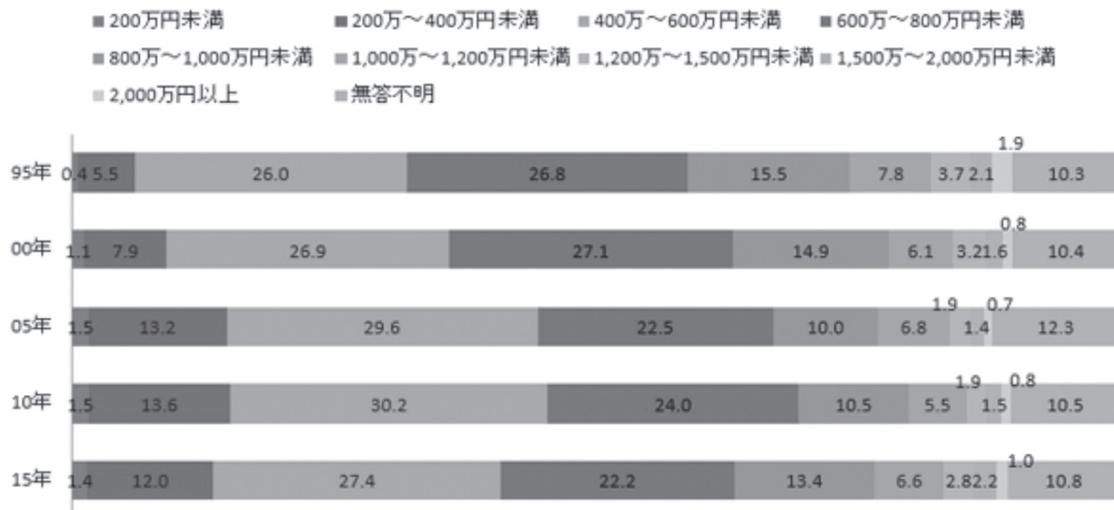


図2 世帯年収

出典：真田美恵子「第7回少子化 ベネッセ教育総合研究所」2016

## 5. まとめ

2009年頃に世代間交流が注目され、特に高齢者と子どもに対する取り組みが実施されている。しかし、高齢者を取り巻く社会の現状は、高齢者などの雇用の安定等に関する法律（昭和46年法律第68号）において、企業に対し65歳までの高年齢者雇用確保措置を講ずることが義務付けられ、静岡市の調査（2018）でも、高齢者就労としては「65歳～67歳台」55.4%、「68歳～69歳台」は45.8%、「70歳～74歳台」では38.7%との就労状況である。現在就労している人の今後の就労以降は、「74歳まで」今後も働きたいは90.0%であった。

また、清家、他（2004）は「高齢期における『生きがい』は多種多様である。一つの例として、仕事や遊び、学習、家事など生活全般に生きがいを見出す『積極型』何らかのスポーツや運動、健康体操等に生きがいをもつ『スポーツ型』、人と異なった才能や能力を持つことに生きがいをもつ『個性型』、自分らしく生きることを重視し、気ままにのんびり暮らすことに生きがいを有する『マイペース型』、さらに社会的な活動を重視する『ボランティア型』などがある。」と述べ、高齢者を対象とした世代間交流は、子ども好き、そして、文化や教育に関心のある高齢者が対象となる可能性が高い。

2016（平成28）年には「ニッポン一億総活躍プラン」（平成28年6月2日閣議決定）において「子供・高齢者・障害者など全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる『地域共生社会』を実現する」との理念が掲げられ、地域住民が支え合いながら、福祉などの地域の公的サービスと協働して暮らすことのできる仕組みの構築が提唱されている。

2020（令和2）年6月には「地域共生社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律」（令和2年法律第52号）が成立し、2021（令和3）年4月1日から施行され、包括的な支援体制を構築するための方策として「重層的支援体制整備事業」（以下「重層的支援事業」という）が創設されたことから、高齢者の存在をフル活用し社会活性化につなぐ具体的な施策も講じる必要がある。

以上のことから、世代間交流は高齢者と子どもの成長を促すためのだけの一つの狭い空間では、限界が生じる可能性がある。今後は社会全体としての保育園の役割を視野に、子どもの健やかな成長を促す環境を創意工夫することがキーワードとなる。

## 6. 今後の課題

高齢者との世代間交流を活発化・有意にするためには、保育士の媒介を余儀なくされる。しかし現在の保育士の中には、高齢者と関わる機会が少ない。川出、他（2003）は「ほとんどの保育士が就任当時、高齢者について怖さや壁を感じていた。そして、保育士が高齢者を怖いと思っている」また、「保育士が高齢者を普通に受け入れられると、子どもも普通に対応し、やさしさを示していた子どもの周りの親や保育士の高齢者への距離が、子どもと高齢者の距離に影響している」と述べているこのことは、保育士の姿勢が幼児に影響を与え園長は、人的な環境設定や高齢者の身体的特性を就任前研修など事前教育が必要である。

以上のことから、今後の保育園が担う役割は、高齢者と幼児の相互作用において地域での重要な場となる。それには、園長はじめ保育士・職員は、社会状況や高齢者への理解等を習得し、万全の態勢で世代間交流の資質向上に勤しむことが課題となる。

また、前述にも述べたように現代の高齢者は、孫と一緒に過ごしたいだけでなく、「自分の人生を楽しむ」、「生き甲斐、やりがい」に大きな比重をおく高齢者も増えてきている。今後の高齢者と子どもの世代間交流において多様な施策を講じる必要性に迫られることは避けられない。

そして、地域コミュニティで生活している他世代は、自分の生活を営む時間帯で高齢者と関わる十分な時間を生じさせることが困難な状況もある。それを如何に捻出し世代間交流に活かせるか、人の発掘を実施していく必要がある。

今回の調査により、A保育園の方針の1つとして「高齢者との関わり」があり、改めて子どもの教育、成長などを考える機会となると考えられる。また、高齢者を媒介とした保育内容の一助となることを期待したい。

## 〔謝 辞〕

A 保育園の園長には、本研究の実施の機会を与えて戴きその遂行にあたって終始、ご協力を頂いたここに深謝の意を表します。保護者の皆様には、アンケートに協力を頂き、ここに深謝の意を表します。

## 〔引用文献〕

- 松下東子 (2022) 「コロナ禍が日本の生活者にもたらしたもの『知的資産創造』10, pp.4-17.
- 文部科学省 (2004) 『中央審議会中間報告のまとめ (子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について)－資料2第4節子どもの育ちの現状と背景－』 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1395404.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1395404.htm) (2020.8.14)
- 小川憲治 (2002) 『IT 時代の人間関係とメンタルヘルス・カウンセリング』川島書店
- 宮木由貴子 (2004) 『「育児期」の母親の生活実態』31.
- 文部科学省 (2005) 『中央審議会子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について (答申)－第1章 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性－』 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1420140.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1420140.htm) (2020.8.14)
- 権藤恭之 (2018) 「高齢者の『こころ』と『からだ』の健康に関する要因の探索－SONIC 研究の成果から－」SONIC 研究グループ『心身医』. 58 (5) .pp.400
- Kagamimori, S., Nasermoaddeli, A., Wang, H., (2004) *Psycho social stressors in Inter-human Relationships and Health at Each Life Stage: A Review*. Environmental Health and Preventive Medicine 9, pp.73-86
- 大日向雅美 (2012) 『2009年～2011年首都圏 " 待機児童 " レポート』子育てトレンド調査  
厚生労働省調査主体：株式会社フォトクリエイト調査実施機関：株式会社インテージ (2016) 『幼児・児童の保護者5,000人に聞く 親子・夫婦・保護者と先生のコミュニケーション実態調査』 <https://www.atpress.ne.jp/news/96444> (2020.8.20)
- 住田正樹 (2013) 「保護者の保育ニーズに関する研究－選択される幼児教育・保育」山瀬範子・片桐真弓『放送大学研究年報』30, pp.25-30.
- 上村眞生 (2007) 「世代間交流 幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究」岡花祈一郎・若林紀乃・松井剛太・七木田敦他『幼年教育研究年報』29, pp.65-71.
- 土井晶子 (2009) 「高齢者施設におけるレクリエーション活動の一環としての高齢者と子どもの世代間交流の効果とその可能性についての考察」前徳 明子『小池学園研究紀要』3, pp.25-42.
- 安永正史 (2012) 「中学生の高齢者イメージに与える高齢者ボランティア活動の影響－SD法による測定と横断分析－」村山陽・竹内瑠美. 他『日本世代間交流学会誌』2, pp.79-87.
- 宮木由貴子 (2004) 『「育児期」の母親の生活実態』『Life Design REPORT』5, pp.31.
- 尾嶋史章 (1990) 「教育機会の趨勢分析」菊池城司編『現代日本の階層構造 3 教育と社会移動』東京大学出版会, pp.25-55
- 荒牧草平 (2000) 「教育機会の格差は縮小したか：教育環境の変化と出身階層間格差」近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会. pp.15-35.
- Blossfeld, Hans-Peter and Yossi Shavit, (1993) “*Persisting Barriers:Changes in Educational Opportunities in Thirteen Countries.*” Yossi Shavit and Hans-Peter Blossfeld eds. 「根強く残る障壁:13カ国における教育機会の変化EUIワーキングペーパー」
- 白井恵美子 (2016) 「親の働き方と子供の家庭教育」小林美樹, 『経済研究』67 (1)
- 真田美恵子 (2016) 「第7回少子化社会と子育てより 研究員の目 幼児の保護者は、今、子育てについて何を感じているか?」『ベネッセ教育総合研究所』
- 静岡市 (2018) 『静岡市高齢者就労に関する実態・ニーズ調査』 <https://www.city.shizuoka.lg.jp/000778232.pdf.12> (2020.8.12)
- 清家篤 (2004) 『高齢者就業の経済学』山田篤裕. 日本経済新聞出版. pp.108
- 厚生労働省 (2016) 『平成28年度版 厚生労働白書』pp.90
- 厚生労働省 (2023) 『令和5年版 厚生労働白書』pp.91
- 川出富貴子 (2003) 「子どもと老人ふれあいに場面創出過程における老人に対する保育士の思いの変容と園児の反応および変容要因」鍵小野美和, 大見サキエ『愛知医科大学看護学部紀要』2, pp.23-30

## [ 参考文献 ]

- 梅谷進康 (2017) 「高齢者の社会参加と生きがい 就労・ボランティア活動と生きがい要素に係る 意識との関係」 石田易司, 信達和典, 他 『桃山学院大学 総合研究所紀要 桃山学院大学総合研究所』 143, pp.49-61
- 草野敦子 (2015) 「世代間交流の理論と実践 『人を結び、未来を拓く世代間交流』」 溝邊和成・内田勇人他. 三学出版
- クリエイティブ株式会社 (2016) 「幼児・児童の保護者5,000人に 聞く親子・夫婦・保護者と先生の コミュニケーション実態調査」  
<https://www.atpress.ne.jp/news/96444> (2023.9.30)
- 厚生労働省 (2023) 「令和5年版 厚生労働白書」 厚生労働省, pp.91
- 胡中孟徳 (2020) 「小中高生の生活時間における社会階層差と親の子どもへの関与」 『数理社会学会. 理論と方法』 35, pp.2
- 齋藤ゆか (2016) 『(コーディネーター必携) シニアボランティアハンドブッケー シニアの力を引き出し活かす知識と技術-』 大修館書店, pp.13-32
- 梅村将成 「高齢者の特徴とは? 身体的特徴・心理的特徴について解説」 『健康コラム』 サントリーウエルネスオンラインの健康食品・サプリメント・化粧品 <https://www.suntory-kenko.com/column2/article/6306/> (2023.10.10)
- 本間容子 (2005) 「高齢者の生きがい」 岡田みゆき 『釧路論集—北海道教育大学釧路校研究紀要』 37, pp.69-79.
- 松延毅 (2020) 「地域文化を伝承創造していく子どもたち-出雲崎のお獅子を作りたい」 『発達』 41. ミネルヴァ書房, pp.59-65.
- まなびとや (2023) 「エリクソンと発達心理学~8つの発達段階の解説とその他の功績~子どもから大人まで」 『学びの情報発信』  
<https://manabitoya.com/erikson> (2023.10.22)
- 綿貫登美子 (2014) 「多様化する高齢期のライフスタイルと生きがい -高齢者の状況に配慮した就業促進と能力活用の取組み」 『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』 pp.2-28